

張子の虎

典厩五郎

てんきゆうごろう



新人物往来社

張り子の虎

典厩五郎

てんきゆうごろう

新人物往来社

〈著者略歴〉

典厩五郎 (てんきゅう・ごろう)

本名、宮下教雄。昭和14年9月東京生まれ。
立命館大学文学部卒。新聞記者を経てシナリオライターとなる。昭和62年『土壇場でハリ
ー・ライム』で第5回サントリーミステリー
大賞と読者賞をダブル受賞。主な著書に『シ
オンの娘に告げよ』『紫禁城の秘宝』『ロマノ
フ王朝の秘宝』『小栗上野介の秘宝』『炎帝の
遺産』『まほろばの城』などがある。

張り子の虎

一九九六年五月三〇日 第一刷発行

著 者 典厩 五郎

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三三三ー一 (新東京ビルヂング) 〒一〇〇
電話東京(三三三)三三三ー一 (営業) (三三三)三三三六 (編集)

振替〇〇一六〇一五一一五一六四三

印刷所 大日本印刷

製本所 小泉製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。



目次

張り子の虎

五

明治糞尿譚

六

二頭立浪の旗風

二九

家康の泣き所

一五三

幕末勤王奇人伝

一八五

慶応四年の南蛮繁葉

二九

装幀／蓬田やすひろ

張^は
り
子^こ
の
虎^{とら}

張^は
り
子^こ
の
虎^{とら}

天保十二年（二八四二）三月。日本橋の晒場きさらばに、一度に四十八人の女犯僧にょはんそうが晒されるといふ事件じけんがあつた。

日頃ものに動じぬ江戸っ子も、ちよつとした躁状態で見物に押しかけた。その人だかりを目あてに、物売りや食い物屋の屋台までが繰りだす騒ぎで、凄まじく混雑した。落首にいう。

時ならぬ冬瓜とうがん船が日本橋 着きも着きたり 四十八僧

吉原名物の夜桜につい浮かれ出た坊主どもが、この世の極楽浄土からの朝帰り、大門口で待ち伏せた役人たちによって、一網打尽とされたのである。

逮捕のきつかけとなつたのは、昌平橋にある寺社奉行松平伊賀守邸の門内に、近頃の坊主どものご乱行を訴えた書状が投げ込まれたことによつてであつたという。

一

これ以上寝ているのは無理な相談だつた。井戸端でのかみさんたちのさえずりは、いつ果てる

ともなく続いている。

女が男より弱いなんて嘘だ。三社祭と神田祭を一度にひきうけたような騒ぎのうえ、力仕事でも男にまさろうとは虫がよすぎる。

ましてこの長屋のかみさんたちときたら、赤の他人の箸のあげおろしが、自分の亭主の浮気と同じくらい気になる連中なのだ。

冬瓜あたまが四十八、日本橋に揃い踏みしているという噂は、だからかみさんたちの血の道を上げるには十分すぎるほどなのだった。

十年ほど前、鼠小僧次郎吉が処刑された日もこんな騒ぎだった。

あの頃、おれもお蝶も若かった。この源兵衛店の裏長屋に越してきたばかりだった。

おれはまだはつきりしない頭を持てあましながら起きあがると、今夜はどこで賭場が立つのだったかをぼんやり考えた。松泉院だった。手拭を肩に表へ出る。

唐天竺までつつ抜けそうな蒼空だ。

井戸端のかみさんたちは、おれの寝呆け顔を見た途端、おつりと押し黙った。

この時刻、ここ深川の浄心寺裏、山本町界隈で布団にもぐりこんでいたのは、おれをのぞけば、この長屋とは目と顎ぐらいにある夜鷹長屋の住人だけだろう。

もつとも、おれが白い眼で睨まれるのには他にもわけがある。

昨日、またおれとひと悶着やった女房のお蝶が、家を出たまま帰ってこない。べつに隣近所に触れまわるほど派手に渡り合ったつもりもないが、この連中にかかったら、朝餉のみそ汁の実だ

つて云いあてられるだろう。それこそ朝めし前にだ。

かみさんたちがおれを見ておとなしくなったのは一瞬だけで、またぞろ坊主のむし返しだった。おれは早々と顔を洗い退散しかけたが、連中のひとりといった言葉にふと足をとめた。

吉原の大門口で捕まった坊主のうちに、仕逃げ和尚がいたというのだ。いい気味だとみんなで笑っている。

冗談じゃない。今夜の賭場の松泉院という寺は、その仕逃げ和尚の竜照が住職をしているのだ。竜照というのは名だたる吝嗇家^{りんしやくか}で、夜鷹の喰い逃げが道楽というふざけた和尚だった。もともと夜鷹といっても、東両国や永代橋の小屋掛けは妓夫^{きゆう}が見張っているので近づかない。

竜照の狙いはだだっ広い木場を根城とするやつで、ゴザ一枚抱えてうろつくひとり夜鷹の喰い逃げをしては、「仕逃げ、仕逃げ」と追いかけまわされていた。

いまはやめている。

二年ほど前、逃げなくてもよい女を寺に囲うようになったからだ、今度は夜鷹のかわりに木場の旦那衆の嫌われ者になった。金貸しをはじめたのだ。

竜照が松泉院のあるじとなったのは五年前で、以前やっていた本山の納所坊主^{なつよ}の時に、うまく立ちまわって小金をつくつたらしい。よくある話だ。

金貸しを開業してまもなく、寺の本堂を賭場に貸しはじめた。おれが竜照を知ることになったのは、その賭場に入入りするようになったからだ。

竜照はよく、てんは金喰い虫だとこぼしていた。てんというのが囲っている女の名で、年は十

五か六、まったくの小娘なのだ。

竜照は男たちを用心して、めったにてんを賭場には近づけなかったが、おれは何度かそのてんの顔を見ている。小春日和に居眠りをはじめたできの悪い市松人形いちまのような小娘で、金喰い虫には見えなかった。

それにしても竜照は、とつくに六十は越えている。少々不出来にしろ、飯にも女ひとりをついていながら、吉原なまで繰り出すとは呆れた元氣者だ。

これで今夜の松泉院での賭場は取りやめだろう。あまり氣乗りもしないが、扇橋の丁字屋へでも足をのばしてみることにした。丁字屋なら毎日のように賭場が立っている。

そう思案すると、とりあえず腹になにか入れることにした。竜照のことなど、それきり忘れてしまった。

あつと思つたのは、釜にこびりついていた残りめしに、冷えた蛸しじみの味噌汁をぶっかけ、一気に流しこんだあと、もうひと寝入りするつもりで横になり、それもしばらくしてという体ていたらくだった。朝っぱらからかみさん連中に、おしゃべりという丸太ん棒でのべつ頭を引っぱたかれたからだろう、よほど呆けている。

やはりおれは、松泉院で勝負しょうぶすることにした。竜照がためこんでいるはずの虎の子をこっそり頂くことにきめた。

あれだけのしみつたれ和尚だ。しこたまの小金をたくわえこんでいるという噂は以前からあった。噂だけではあてにならぬが、おれは本人の口からも聞いていた。

いつだったか松泉院での賭場のとき、いつもは奥の庫裡ぐりに引込んで顔も出さない竜照が、振舞い酒の勢いで賭場に迷いこんでできたことがあった。

その日おれは大時化けで、のぼせた頭を冷やそうと、ひとり勝負から離れていた。そこへ竜照が、酒くさい息でからんできたのだ。

そのとき、どういいういきがかりだったかは忘れたが、二百や三百ならいつでも手元にあるから積んでみせると口をすべらせたのだ。あの竜照がだ。

金が必要だった。それもまとまった金が。きのうのお蝶とのいさかきも金が原因だった。いつだってそうなのだ。

近頃、賭場に行くのさえおつくうなほど、体がだるくなることがある。なにをする気にもなれず、ひねもすぼんやりとしてすごすこともあった。それでいて、以前は気が遠くなるほどながかった一日が、信じられぬ早さで暮れてゆく。

三十八といえはいい年だ。でたらめの暮らしもこのあたりが引き際だろう。

おれとお蝶とは三つちがいだった。あのお蝶のやつが三十五にもなるのだ。いまさらに、刻ときというものの無慈悲で荒々しい手ざわりには呆然とする。

お蝶のことはいい。またいつものように連れもどしに行くだけだ。いまは金のことだけを考えねばならない。

坊主の女犯は、寺持ちの住職が遠島おんとう。寺を持たぬ所化僧しやくわそうは、三日晒しのうえで本寺に引き渡し、傘一本持たせて追放ときまつている。

だから日本橋で晒されている四十八人は、すべて所化僧ばかりというわけだ。寺持ちである竜照は晒しにはならず、島送りの船が出るまで牢屋で待つことになるのだ。

遠島ときまつた竜照には、いくら金があつても猫に小判でしかない。島送りの者が抱いてゆくことを許されている金は、二十両が限度ときまつているからだ。

竜照は金のためにずいぶんと人を泣かせてきたろうが、人助けをしたことはまずあるまい。その好機を、いまおれが与えてやろうというのだった。

二

深川から日本橋方面へ行くには、新大橋か永代橋を渡らねばならない。

ところがここ山本町は、南の永代橋が浄心寺、西の新大橋は靈巖寺と左右の前方をすつかり塞がれている。まわり道をするには寺がバカでかすぎた。

道はある。二つの寺の間を突つ切るのだ。昼でも薄暗い裏路地を縫うようにしておよそ三丁、靈巖寺の表門前町へ出る。あとは高橋でまがり、小名木川おなぎに沿って万年橋まで行くと新大橋、という按配だ。

昼間はこれでいい。厄介なのは夕刻以後で、両寺とも裏手に焼場がある。その焼場が、日暮れになると毎日、親の仇とばかりに路地を挟んでいぶし合いをはじめなのだ。

夜通しやる。江戸で指折りの大寺のうえ、どちらも投げ込み寺ときている。焼きあげる仏の頭数にはこと欠かない。

焼場に挟まれた小路は、わずか半丁たらずだが、人間という生きもののへの考えを根こそぎ変えるような悪臭を放った。

土地では駈け抜け小路と呼ばれている。誰もが鼻を覆い息を止めて駈け抜けるからだろう。

おれはその駈け抜け小路を過ぎ、靈巖寺の裏門を潜^{くぐ}って境内へと入った。目指す松泉院はすぐそこだ。つまりそれだけ焼場に近いということで、三十以上ある靈巖寺の塔頭^{たつちやう}のなかで、松泉院はもつとも気が滅入る場所を占めているわけだ。

勝手知った松泉院の耳門^{みみかど}を開ける。裏庭へ一步入ったとたん、様子がおかしいのに気がついた。耳を研ぎ澄ます。なまぐさい風が頬を撫^{なで}でた。人が争っている。表の書院ではなく、奥の庫裡あたりだ。

濡れ縁伝いに廊下へ上がり、足音を忍ばせて庫裡へ近づく。

杉戸の隙間から剃き身の白い女の脚が見えた。その脚が暴れ馬のように景気よく飛び跳ねている。

おれは思いいきりよく杉戸を開け放った。ピシリ！ 小気味のよい音がした。

てんを組み敷こうとしていた男は、仰天して飛びさがった。この程度で心の臓を悪くするようでは、しよせん小者ということだ。

双子縞を着流した男は、一見して遊び人風——つまりこちらとご同様ということだが、年格好はおれよりひとまわりは若そうだ。

てんはあられもない格好だった。帯が胸のうえまでずりあがっているので、着物ははだけ放題、

腰から下をすべてご開帳だった。

「なにをしている」

われながら間の抜けたせりふだった。子供でもわかる芝居場だ。

男はまだ荒い息をしていて、口をきくどころではなさそうだった。いまからこんなにくたびれていて、いったいこのさきなにをするつもりだったのだろう。

「女に力づくとは、よくねえ料簡だ」

おれがいうと、男は口よりさきに手を動かした。

いきなり懷からあいくち匕首を抜いたまでは素早かったが、あとがいけない。匕首を腰だめにぶつかってくる男の動きは、おれの目には亀よりものろく見えた。

おれが体をひらくと、男は勢いあまって杉戸から廊下へ転がり出た。そのまま逃げるのかと見てみると、こちらに向き直った。まだやる氣らしいので、つき合うことにして廊下へ出る。

男はじりじりと後退した。

かまわず前へ出る。さらに後退をしたが背後はかわや廊で行き止まりだった。

やぶれかぶれのように突進してきた。

今度の突きは少しでしたたが、まだ欠伸あくびをするひまはあった。おれは匕首を持った男の手首を掴み、ねじり上げておいて指のさきに少し力を加えた。

顔を歪めて匕首を離れた男の胸を軽く突く。

男は濡れ縁の端で踏み止まろうとしたが、無理だったようだ。仰向けのまま、大きな石造りの